仕方なく泣く、また歩いて帰りました。歌島橋のところで、野地組にいた時の仲間の一人にあいました。彼も野地組をやめて、今は新聞販売所で働いているといいました。景気はよくないと言っていましたが、私よりましには違いありません。電車賃を貸してくれ、と恥をしのんで頼みましたが、冷たく断られました。

三日も飯を食べていませんでした。尼崎から梅田まで往きも帰りも歩いたのです。物を言う元気もありませんでした。

素人下宿屋の前にたどりついたとき、その門口に別の友だちが立っていました。電話局につとめている若い友だちで、やはり同人雑誌の仲間でした。

若い友だちは私の顔色を見てビックリしました。後で殺人のようだったと言っていました。そうだったかもしれません。

若い友だちは私を近くの食堂へつれて行って、素ウドンをおごってくれました。若い友だちも貧乏で金がなかったのです。

でも、地獄で仏でした。

友だちと別れて、部屋で一人になると、グッタリしました。明日はどうなるんだろう。そう思うと、意地ッ張りの私もチョッピリ悲しくなりました。

そうやって飲まず、食わずや、食べたり、食べなかったりの日が続き、とうとう私は下宿屋を引き払う決心をしました。

下宿屋だから、食事は頼めば作ってくれたのですが、金がないから部屋だけの約束で入っていたのです。

その部屋の敷金が、たまっていた部屋代を差引いても少し残りました。それで当分のエサ代が出来ました。

私のことを新聞記者だと思いこんでいる素人下宿屋さんには、

「実は……」

と、本当のことをついに話さないまゝでした。そんなことを言って驚かすのが気の毒だったからです。だから、今でもあの人たちは私のことを新聞記者だと思いこんでいるかもしれません。

荷物は自転車一台で運びました。引越しというにはあまりにお粗末な荷物でした。

その自転車を引っ張って歩くと、ロクに飯を食べていない私はフラフラしました。

通りがゝりの人が驚いて寄ってきました。

「どうかしましたか。具合でも悪いんと違いますか」

「いえ、何でもありません」

それはちょうど、大きな病院の前でした。

「あゝ、退院しはったんですか」

「え、ええ、そうです。ムニャムニャ」

「お目出度う。お気をつけて」

親切な人はいるものですね。でも退院患者と思われるほど、自分がフラフラして顔色も悪いのかと思うと、いよいよミジメでした。

わずかな荷物でしたから、着替え少しをつめたスーツケース一つを残して友だちに預けました。身軽になって尼崎市内の飯場にもぐりこみました。

何という飯場だったか忘れました。そこは薄暗い陰気な飯場で、すぐやめました。それからまた別の飯場に入ってそこもやめて、その次に同じ尼崎市の道意町というところにあった松本組に入りました。

松本組というのは、西宮の藪野建設の下請で、藪野建設は主に、竹中工務店と柄谷工務店の仕事をしていました。竹中工務店の方は説明はいらないでしょう。柄谷工務店は尼崎市では名前の知れた業者です。

松本組には、直カツの飯場もありましたが、親方の実兄の本田という人が世話役格で飯場を持ち、従弟の正雄という人も同じく世話役格で飯場を持ち、更に妹ムコの平山という人もやはり世話役格で飯場を持っているというように、四つの飯場がありました。

私が入ったのは、その中の平山飯場です。一九六〇年（昭和三五年）の秋も深まった頃でした。

入口を入るとすぐ、うす暗い五坪ほどの食堂になっていて、私より少し年長かと思える女の人がいました。平山親父のヨメさん、つまりこの飯場の姐さんでした。

「動かせてもらえますか」

と言うと、その女の人は私を品定めするようにジロジロこわい目で見て、

「うちの仕事はしんどいでエ、お前ようやるか」

と、男のような乱暴な調子でききました。口のきき方だけでなく、態度もまるで男のようでした。

「たいていの事は辛抱できますよ」

と、やわらかく答えましたが、肚の中ではこのアマ、何て生意気な奴だ、とムカムカしていました。

「荷物は」

というので、スーツケースを見せ、落ちついたら友だちの所に預けている分も取り寄せるつもりだ、と答えました。

「フン」

と鼻の先を鳴らすような声でうなづき、それからまた私の頭の天辺から、足の爪先までゆっくり見て、

「ま、辛抱出来るかどうか、やってみいや」

と姐御はいいました。まるで親方みたいな口の利き方です。

やっとまた飯場に入れてホッとしたのですが、内心さは、ここも余り長続きしそうもないなと思ったものです。

それがまさか、その後十年近くもこの飯場に住みつくことになろうとは、その時はだから、少しも思わなかったのです。

ずっと後になって、姐御がこんなことを言いました。

「あの時は、やせてヒョロヒョロしたのが来たから、どうせ三日ももつまいと思ったんやけど」

たぶん、モサコケつゞきで、ヒョロヒョロしていた私は、姐さんの目からだけでなくとも頼りなく見えたのでしょう。

また、これもずっと後になってのことですが、姐御はこんなことも言いました。

「飛びこみで飯場へ来る奴は、まず荷物を持ってるかどうか確めるんや。荷物の少い奴ほどすぐトンコするからな」

なるほど！　と合点がいきました。野地組の番頭に妙に白い目でみられたのは、夜、飯場にいなかったからだけでなく、そのうえ、飯場に荷物を持ちこんでいなかったから、うたがわれたのでした。勉強になりました。

この姐御は口のきき方も、態度も男のように乱暴でしたが、長くつきあっていると、根は気の優しい人だということが、だんだん判りました。

晩めしのおかずは塩鯖でした。決してうまいものではありません。しかし、モサコケの私にはどんな山海の珍味にもまさるご馳走でした。本当に腹をへらしたことのある人でなければ、このときの私の胃袋の感激は判ってもらえますまい。涙が出るほど有難かったと文字に書けば。気障にきこえるかもしれませんが、本当にそんな気持ちでした。

ちょうどそこへ仕事を終った仲間たちが、二、三人帰ってきました。酒をのむ者、すぐ寝ようとする者、どこの飯場でも見かける夕方の光景です。

私は先輩たちにあいさつしました。オオとか、ウンとか、かんたんな返事が返ってきたり、こなかったり、これまたこんな場合によくみかける飯場の風景です。

私のとなりに、色の白い、土方にしては色の白すぎる小柄な男が腰をおろしました。私より少し年下に見えました。

その男は晩のおかずを見るなり、

「何だ、こんなもん、猫もくわんわ」

と、さも憎さげに吐きすてるようにいうと皿の中の塩

鯖をポイと残飯桶に放りました。

アッという間の出来事です。私は呆ッ気にとられました。この人は一体どんなお金持ちのお坊ちゃまなのでしょう。私が涙が出るほど有難たがっているものを、いとも無雑作に棄ててしまうなんて。

男はそれだけで足りなくて私に

「人間には、人間の食べるようなものを食わせろっていうんや、なア」

と、合槌を求めました。姐御にも聞えるほど無遠慮な大声でした。

私は返事も忘れて、男の顔をポカンとながめていました。

府警警察署

あいりんの対話

1973-12-10 路毛新聞

うさ晴らし組にも親身に…

本の紹介

釜ケ崎変遷史

天平元一

夏の書房　九八〇円

医療センター職員の天平さんが、仕事の合い間にコツコツと集めた資料にもとづいてまとめた釜の歴史戦前篇。

前にキリスト教の云頻さんが「地図にない町の歴史」の日本キリスト教団というのを出したが、これと違って資料が多く入っているのが、読みものとしてはちょっとカタイけど、勉強したい人にはいい本だ。

後半には　天平さんが「裸の会」に発表した詩も載せてある。「労働者」時代の表紙を込めた詩がいい、ぱいある。

この本を買って勉強しようかな。（ア）

☆バックナンバー（在庫）

23号ーろてん特集　24号ー第二回労務者演世集　27号ー飯場のめし特集　28号ー飯場生活

お握り屋にあります

次号は「人夫出し」特集の予定です。二月末発行するので、一月末までに便りを下さい。

労務者演世　第二九号
一九七八年一二月二五日発行
大阪市西成区萩之茶屋3ー6ー35
「御握り屋」気付
労務者演世編集委員会